そして何よりも，同じ所属であっても，互いにどういった研究をしているのか，どういったことに関心があるのかなどについて知らないことが多いように思います。この研究会は，そういった意外に知らない同じ所属の院生や研究者が，各々の研究の報告をすること通して，互いの研究を知り，議論する場をとしての役割をも担っています。

また，この研究会に私自身参加してから 6 年以上が経ちますが，様々な分野の，そして多様なフィールドやテーマの報告を目の前にして改めて思うのは，「社会」あるいは「地域」とはいったい何なのか，ということです。つまり，「社会」／「地域」は私たちが今生活するなかで築いている人間関係や所属している集団，直面している社会的問題等に見出すものをいうのか，あるいは自分自身が研究として目の前にしている対象に見出すものをいうのか。私自身，自分が今生活している中にしか，あるいは自身が研究している対象を通してしか「社会」／「地域」が見えていない，あるいは「社会」／「地域」を見ていないのではないか，ということに気がつきます。

テーマや分野が異なれば，そこで取り上げられる「社会」／「地域」の形，あり方が違ってみえます。所属や分野の異なる研究者の交流を兼ねたこの研究会は，言ってみれば自分が漠然と抱いている，あるいは限られた「社会」／「地域」を，改めて再考することのきっかけになっているように思います。この点に研究会の一理を見出せるならば，特定の分野や領域，テーマにこだわらず，開かれたこの研究会は，発足時から掲げる「知の創造」を開く場としての積極的な意義をもっているように思います。

最後に，もっと多くの研究者や院生の方々に，この研究会の存在を知ってもらい，参加してもらい，交流を深める場として活用してもらい，この研究会が「知の創造」の場として，各々の研究を豊かなものとし，今後の研究の活路を見出していただけるような場となっていければと思います。

Ⅳ　博士論文をふりかえって

博士論文をふりかえって

名古屋文理大学健康生活学部准教授
中村 麻理

2010 年 3 月に「『食育』のシンボル構造と集合行為をめぐるダイナミクス―日本のスローフード運動と JA 食農教育に注目して―」で博士（社会学）の学位を取得いたしました。指導教員である丹辺先生には、ここまでの道のりを終始丁寧にお導きいただきました。先生への感謝の気持ちは言葉で表すことができないほどです。また、副査の労を賜りました河村先生、青木先生、地理学講座の高橋先生には、ご多忙にもかかわらず拙稿をご精査いただき、貴重なご指摘を頂戴いたしました。そして、社会学講座の西原先生、田中先生、黒田先生、上村先生には、論文作成セミナーおよび論文提出資格審査セミナーをはじめと

する様々な機会におきまして、コメントやご示唆、激励などを賜りました。まずはこの場をお借りして、お世話になった全ての先生方に御礼を申し上げたいと存じます。

ところで、現在博士論文に取り組んでいる、あるいは、将来的に執筆予定であるという社会学の大学院生の方々の多くがこの会報をお読みになるかと思います。多忙のため、院生の皆様とお話をする機会があまりございませんでした。そこで、いささかでもご参考になる点があればと存じ、あくまで私のケースではございますが、2010 年 3 月に至る道のりを、以下に簡単に辿らせていただきたいと考える次第です。

学位請求論文提出には、基準以上の学術誌で査読付き論文 2 本という業績上の条件がありますので、まずはこれをクリアしなければなりませんでした。博士後期課程に進学してからは、丹辺先生にご指導いただきながら、論文を書いては投稿を繰り返し、なんとか目標に到達することができました。また、この時期には、並行してフィールドワークを継続し、データ収集に努めました。日本のスローフード運動や愛知県の JA 関係者の皆様のご協力なくして博士論文の執筆は叶いませんでしたので、本当に感謝申し上げております。

博士論文そのものに向けての本格的準備に入ったのは、2008 年春のことです。5 月の論文作成セミナーでスローフード運動に関する章について、2 ヵ月後である 7 月の社会学総合セミナー(名古屋大学社会学会大会)で JA の食農教育活動に関する章について発表することを通して、研究の進捗状況をご報告させていただきました。8 月には JA 女性部の部員を対象としたアンケート調査を実施、ここで得られたデータをある程度盛り込んだ形で 10 月の論文提出資格審査セミナーに臨み、なんとか提出資格をお認めいただくことができました。

続いて待っていたのは、予備審査という次なる目標に向けての本格的な執筆作業です。自己管理の苦手な性質であることを自分自身よく知っておりますから、章ごとに締め切り期日を設定し、丹辺先生にご報告におうかがいするという目標を自分に課しました（先生にはご迷惑だったと思いますが)。先生のご迷惑も顧みず、足繁くご報告におうかがいし、2009 年 7 月に予備審査提出のご指示をいただきました。その後、査読の先生方のご指摘にもとづいて修正作業を行い、9 月上旬には学位申請書等の書類一式とともに、仮製本を大学院担当窓口に提出し、10 月の教授会で受理していただきました。窓口提出が済んでの安堵もつかの間のことで、執筆作業は続きます。11 月には先生方から審査結果のコメントをいただきましたので、再び修正作業に入りました。査読の先生方からご了承をいただいたのは 2010 年の 1 月上旬で、若干の修正を経て、1 月下旬にようやく本製本するに至りました。その後、2 月の公聴会および口述試験を経て、3 月の教授会でお認めいただきました。

博士論文に取り組みました博士後期課程在学期間を改めて振り返ってみますと、私の場合、とにかく時間との戦いの日々でした。平日の夕刻までは基本的に勤務先の業務にすべての時間をあてなければなりませんでしたし、帰宅後は育ち盛りの子どもがお腹をすかせて待っておりましたので、とりあえずは家事を先にこなす必要がありました。したがって、自分のためのまとまった時間は深夜と週末、夏期・冬期休暇等の長期休業期間に限られておりました。休日出勤のない土曜を翌日に控えた金曜日には、明日は論文執筆ができると思い、心の底からうれしい気持ちになったことを思い出します。このように忙しない日々ではございましたが、思い悩む暇が全くなかったため、かえって無心に博士論文と向き合うことができたのだと思います。名古屋大学大学院の社会学講座という恵まれた環境で、周囲の皆様のご支援、特に丹辺先生のご指導のもと、博士論文を書かせていただいた日々

は、私にとって本当に贅沢な時間でした。とりわけ終章執筆中は苦しい時期でしたが、得がたい経験をさせていただいたと感謝しております。今後の研究活動はお世話になった皆様へのご恩返しであり、精進するよう努めなければならないと改めて自戒しております。